

があり、地域全体に多様性があるということも大きな魅力です。アメリカのある都市経済学者が、どんな大都市でもイノベーション(革新)が起これなければ衰退すると言っています。イノベーションを起こすには、才能のある人が集まることが必要です。ではどうすれば集まるか。それは多様なものを受け入れる寛容さだと言っています。寛容な街には、才能豊かな人が集まってくるというのです。関西人の気質の一つにアンチ東京がありますが、アンチだけでは先はないと思います。私たちは、関西以外の地域に対して寛容でしょうか。さまざまな文化を受け入れる寛容と多様性を育てていくことが、関西がイノベティブであり続けるために非常に重要なことだと、私は思います。

園田 イノベーションという偉大な天才が書齋にこもって考えつくというイメージがありますが、実はそうではなく、日常的な工夫や面白いことに目をつける、そういう些細な行為から起こってくるんですね。例えば日本の代表的な料理に寿司と天ぷらがありますが、これを同時に味わうために「寿司天ぷら」を作ってみようという人が現れる。成功するか否かに関わらず、そういうところから文化の強みを見つけていく。そして多くの場合、そういうチャレンジングな人は本道から少しだけ外れたところにいる。まさにサンシャインさんのような人です。それをプロデュースする人がまた、少し外にいる。外にいる人を上手く取り込み、中にいる人を外に送り出していく。多様性のある人がそういう感性を持っていれば、いろいろな文化

の発信・受信が促進されるのではないかと思います。

近藤 私は、関西には、日本が陥っている「東京病」、つまり官主導縦割り、文化の軽視、短期成果主義などから国を救う力があると思っています。具体的には、関西に根付いている伝統文化を重んじ、異なる新しいことをどんどん取り入れていくということです。伝統芸能を見ている、活気のあるジャンルは常に新しいものを咀嚼しながら取り入れています。そういう力が関西にはあります。東京病にかからず、ぜひ踏ん張っていただきたい。

桂 村田先生が言われたように、大阪が発展してきたのはまさに寛容の精神だと思います。大阪の寛容さは、「しゃれ言葉」に代表されるようなユーモア精神です。見るだけで何も買わない客を「ひやかし」だとストレートに言わず、「夏のはまぐり」としゃれてみる。「身腐って貝腐らん(見くさって買いくさらん)」と言うわけです。また、資金不足の人は「赤児の行水」。たらいで泣いてる(お金が足りないで泣いている)。他にもたくさんあります。こうしたユーモア精神があれば、大阪は大丈夫だと思います。最後に2020年のオリンピックですが、東京ばかりになるのは心配なので、私はここでもう一度、大阪への万博招致を提案させていただきます。

国分 「多様性」「寛容」「イノベーション」「ユーモア精神」と、重要なキーワードが導き出されました。関西のより一層の文化力発信に期待します。ありがとうございました。

関西・大阪文化力会議を終えて

地球規模の視座を持って アジアの国々と心の通い合う交流を

今回は、エズラ・ヴォーゲル名誉教授から、現代中国の父といわれる鄧小平の生涯と思想を通じて、現代中国の源流と今後中国が進むべき道について示唆に富むお話を伺いました。また、パネルディスカッションでは、大切な隣人である中国、韓国はもとより、広くアジアの人たちと文化を通じて理解と交流をどのようにして深めていくのかという課題に対し、「多様性」「寛容」といった重要なキーワードをいただきました。

ここで私は、当協会の設立に関わられました梅棹忠夫先生が、かねがねおっしゃっていたことを思い出しました。それは、「地球の北緯20～50度、東経120～150度に位置している日本にとって、その横軸(緯度)上にある国々、つまり日本列島の西側にある大陸国家とうまく付き合いながら、さらには縦軸(経度)上の国々とも連携を強化していくべきだ」



公益財団法人 関西・大阪 21 世紀協会
理事長 堀井良殷

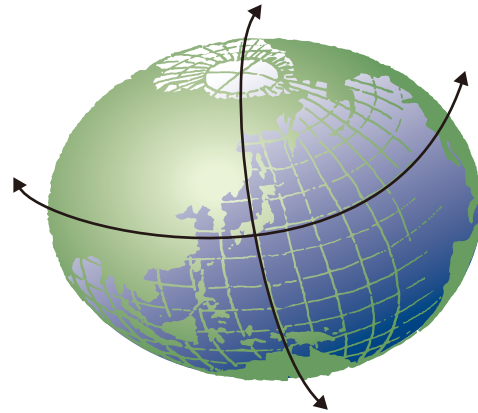
というものです。

とくに関西は、縦軸上にある東アジアの国々と深く付き合い合ってきた歴史があります。17世紀初頭の大航海時代には、ご存知黄金の日々を築いた堺の港から、御朱印船や末吉船などが頻繁に東南アジアの国々と交易や文化交流を展開しました。本日は、こうした歴史を未来に活かしていくべきだというご意見もいただき、あらためて、関西は横軸・縦軸ともに心の通い合う交流によってアジアの発展と平和に貢献していかなければならないという思いを強くしました。

今回の関西・大阪文化力会議「中之島宣言」は、そうした広い視野に立った思いを込めて、本日の議論を総括したものであります。朗読していただくのは、文化と芸能の神である「摩多羅神(またらしん)」に扮する和泉流狂言師・小笠原

匡さんです。

なお、今回はフィナーレとして、イタリアの仮面喜劇団「コンメディア・デッラルテ」の俳優であるアンジェロ・クロッチェさんたちにもご協力をいただき、ガムラン音楽に合わせて、光の神と闇の神の争いを摩多羅神が調和するという舞をご覧ください。小笠原さんが演じる摩多羅神は、まさに日本のキーワードである「寛容」の象徴でもあります。



関西・大阪文化力会議

中文島宣言

亜細亜太平洋 多様な価値観が渦巻く地域なり
 海の国ニッポンは 南北軸に重きをおき 地域安定と発展のため
 経済交流 文化交流の誘い役を果たすこと しかと心得るべし

文化は 創造力と共感の源なり

日本最初の万国博開催地 浪速より

人類のさらなる進歩と調和を推進すること 関西の務めなり

ニッポンの魅力は これ 経済力 と 文化力 なり

関西に 唯一無二の技術あり

また 関西に様々な文化あり

技術を磨き 高めること

文化を育み 醸成すること 経世済民とは此のことなり

関西復活百年の計は、先を見る力のある者
 才ある者を育てることと心得るべし

此如く 浪速の地より事始め

萬民ともに力を尽くすべし

萬民ともに力を尽くすべし

平成二十五年九月十日
 関西・大阪文化力会議



小笠原 匡さん
 公益財団法人 能楽協会会員 大阪支部所属
 日本能楽会会員 重要無形文化財総合指定保持者

フィナーレは賑やかな神々の舞

光の神と闇の神の争いを、小笠原 匡さん演じる摩多羅神が、寛容の精神をもって平和へと導くストーリー。日本(狂言)、イタリア(即興仮面劇)、インドネシア(ガムラン演奏)の伝統芸能によるコラボレーションが披露された。

